現代ロシア語における不定形構文の構造と叙想表現について

三 谷 恵 子

I. 「不定形構文」の諸タイプ

I－1. 現代ロシア語の文法構造内で動詞の不定形 Vinf が種々の統辞機能を荷負う点は，他の多くの印欧語と同様であるが，ロシア語では特に述語に不定形を用いる構文の発達が著しい。所謂 Инфинитивное предложение はとりわけ表現の簡潔さと叙想性の豊かさによって際立っており，無人称文との文法的関連づけや文の構造要素間のシンタクティックな関係をめぐって様々な議論がくり広げられてきた構文である。本稿ではこのタイプの文の構造及び叙想表現との関係についてまとめてみたいと思うが，その前にまず「不定形構文」に属する文のタイプと意味特長を把握したい。本稿では，Vinf を述語とするすべての構文を「不定形構文（Pinf）」と名づける。従ってこれは一般に用いられる инфинитивное предложение の訳語としては用いない。さて，一口に Vinf を述語とすると言っても，文中の他のシンタグムとの文法的関係や，Vinf で実現される述語の，動詞の辞書的意味以外の意味は一様でなく，Pinf はいくつかの構文の型に分類できる。以下にそれらの型を挙げていくが，ここでは伝統的な一項文（односоставное предложение），二項文（двусоставное предложение）という分類法に従うこととする。（本稿で扱うのは単文のみである。複文においても従属文の述語に Vinf が用いられる構文があるが，ここでは割愛する）

I－2. Pinf が二項文になる型としては次の二つがある。

(1) Nn－Vinf

Nn は主語となる名詞主格形で，Nn と Vinf は意味上等号で結ばれる： Наш долг —— бороться за мир（我々の義務は平和のために戦うことである）

Nn と Vinf は ティレで結ばれる。ティレ以外に結合要素として это, значит, это значит, あるいは стать, становиться, оказаться, оказываться が用いられることもある。また Nn－Vinf は次のような現在形，未来形，過去形及び接続法のパラダイムを実現させる：

現在形　Задача —— учиться.
過去形　Задача была —— учиться.
未来形　Задача будет —— учиться.
接続法　Задача была бы —— учиться.

〔Р.Г. §§ 2382-2388 注1)〕

(2) Nn ＋ Vinf

このタイプの Vinf は動詞定形 Vf に変換が可能であり，二通りの用法がある。第一は物語の中で過去に突然起こった行為を描写するもので，Vinf によって示される行為は常に過去の時称に属する： Он как захохочет, да-целовать.（彼は急に笑い出し，いきなり接吻しはじめた）. 第二は第一の用法と外見的には差がないが，会話の内で用いられ発話と同時の，あるいは未来の行為について述べるものである。この際，行為の急激な開始の意味は弱まり，話者の驚き，疑惑，願望等の感情が投入される： Ты подкупать меня! （私を買収しようと

いうのか！）[Г.Р.Я. т.II §494]

以上のようにVinf を述語とする二項文を，PinfIIと略すことにする。今，Nn－Vinfのタイプと Nn+ Vinf のタイプを PinfII に属する構文としたが，両者の Vinf の性質が異なることは明らかである。Nn－Vinf の文で Vinf は単なる行為の名ざしを行うのみで，述語を動詞述語（ глагольное сказуемое）と名辞述語（ именное сказуемое ）に区別する伝統的文法書に従えば動詞述語から排除されるべき性質のものである。[Лекант, стр.53] これに対し Nn+ Vinf の Vinf は Vf に置きかえが可能で，単純動詞述語（ простое глагольное сказуемое）とみなされる。[Г.Р.Я. т.II §494]

Nn＋Vinf 型の Vinf が全て不完了体であることもこの構文の特徴である。[Г.Р.Я. т.II §492]

I－3．一項文即ち所謂 инфинитивное предложение の述語として Vinf はしばしば用いられる： Мне делать доклад.（私は報告をしなければならない） Молчать!(黙れ！)

このタイ

能は何によって荷負われているか，そして叙想の意味と構造の間にいかなる関係があるかという三点に注目しながら検討を進めていきたい。

II．PinfI の構造と叙想表現について

II－I．PinfI は時制と法によって四項のパラダイムを実現しうる。

a^0： Нам вместе работать（我々は共に働かねばならない）.

a^1： Нам было вместе работать.

a^2： Нам будет вместе работать.

a^3： Нам было бы вместе работать.

[Р.Г. §2567]

a^0 が最も普通に用いられる形の PinfI である。a^1～a^3 の型をa^0 のパラダイムによってとらえるのは70年文法以来定着した考え方だが，それ以前の文法書では a^1～a^3 は a^0 とは別の構造の文とされていた。 Тимофеев によればa^1～a^3 の文は無人称動詞としての быть に Vinf が付加されて述語を構成するが故に，非従属不定形（ независимый инфинитив ）を述語とする a^0 型と基本的に異なる。彼は a^1 以下の型の文を глагольно-инфинитивное предложение と呼ぶ。Галкина-Федорук は，было，будет＋Vinf の複合形を，a^0 型の инфинитивное предложение の述語形態の範囲内におきながら，この複合形は周辺的なもので中心的構文の定義には関係しないと見，a^0 型との関連づけを行っていない。[Тимофеев, стр. 289-291 / Галкина-Федорук, стр.200-245] 従来の研究においては，a^1 以下の文が実際に現われる機会が a^0 に比べ遥かに少いという現象面の差を文法的差に置きかえてしまった点と，инфинитивное предложение の述語は非従属不定形（文中の他のいかなる語にも従属しない Vinf）でなければならないと定義していた点が，a^0 型と a^1 以下の型の文との明確な関連づけをさまたげていたと考えられる。さて，PinfI が a^0～a^3 のパラダイムを実現させることから PinfI は次のように表記することができる。

Nd＋ [Быть] ＋Vinf

ここで Nd は Vinf が表わす行為の実行者たるべき人（場合により物）を表わす名詞（代名詞を含む）与格。[Быть] は быть の無人称形，現在形＝Ø， 過去形＝ было ，未来形＝ будет ，接続法＝ было бы で実現される。実際には [Быть] ＝Ø の場合が最も多く，次いで было ， было бы が用いられ， будет となる例は稀である。これ

は［Быть］＝∅が未来に属する，あるいは現在から未来へ向けられる行為について言及するためである。［Р.Г. §2567］PinfIにおいてVinfと〔Быть〕が必要不可欠な要素であることは明白である。Ndは発話の状況によって表現されない場合もあるがVinfで表わされる行為の実行者は必ず存在するはずであるから，NdもまたPinfIにおいて不可欠な要素といえよう。[Veyrenc, p.19]

Ⅱ－2．今PinfIに三つの基本要素を求めることができた。PinfIが叙想性に富んだ文であることは周知の通りで，Vinfが表わす行為内容に行為の必然性，義務，可能（不可能），意志，願望等の叙想の意味が投入されて提示されるのである。この様な叙想表現を行うのがVfではなくVinfを述語とする構文であるという点からКуриловаはPinfIのタイプについて「大きなエネルギーと明確さを表現する特殊な文体的統辞的手段で，それは内的硬化（внутренная окаменелость）を持たない不定形の得た力による」と表現している。[注2)] 同様にИсаченкоは「Vinfはそれ自体が何らかの叙想性を持つわけではないが，いかなる文法的制約をも持たないという否定的性質ゆえに述語として機能し，叙想表現を行い得る」[注3)]としている。しかしながら，Vinfが叙想表現機能を荷負うとする以上の指摘は，VinfがVfに対し動詞の諸形態論的カテゴリー（時制，人称，法）の標示手段を欠くことで対立する事実と，PinfIが叙想表現を行うという現象を理論的裏付けなしに結びつけた結果によるものと見ることができる。またPinfIの叙想表現においてイントネーションが重要な役割を果たすことが多くの場合指摘されてきた。［Г.Р.Я. §1052］PinfIにおけるイントネーションの働きが重要であることは事実であるが，特別なイントネーションを含まないPinfIが叙想表現を行うのもまた事実である：Быть грозе великой.（大嵐がおこるにちがいない）従ってイントネーションはPinfIの基本的な叙想表現に補助的な意味を添えるもので，その叙想表現機能の根本を支えるものとはなりえない。ではPinfIの叙想表現機能はどこに求め得るのか。60年文法は極めて簡単に「文の形それ自身」にあるとしている。［Г.Р.Я. §1052］これを，Ⅱ－1.で明らかにしたPinfIの構造にあてはめてみよう。PinfIの述語は過去に考えられていたような非従属不定形ではなく［Быть］＋Vinfの複合形である。この複合形を述語にもつPinfIが叙想表現を行うことは，同様にVinfを述語としながら叙想表現を含まないPinfⅡのVinfが単独で述語となる点と比べて注目すべきであろう。PinfIにおける叙想表現機能は，［Быть］＋Vinfという述語構造にあると考え得るのである。Veyrencはこの点に関して，印欧語における二つの基本動詞即ちhave動詞とbe動詞がVinfと結合し，義務や可能性，必然性についての叙想表現を行う言語の例を挙げ，ロシア語におけるこの表現形式の実現がPinfIだと述べている。［Veyrenc, p. 36－39］Veyrencの説についての検討は，他の印欧語との比較検討と，更に詳しいPinfの意味分析を必要とするのでここでは省略するが，Nd＋［Быть］＋Vinfの基本的意味を探るうえで興味深い点を含んでいるといえよう。さて，次にPinfIが実際にどのような外見でどのような叙想の意味を表現するかを見ていきたい。

Ⅱ－3. 従来PinfIをいくつかのグループに分類する際用いられてきた方法として最も一般的なものが叙想の意味による分類法である。とはいえ，過去の研究ではPinfIを叙想の意味という観点からのみ分類した業績は少く，シンタグマティックな区別が介入したり（60年文法は構文を　を含む文と含まない文に分ける方法をとっている。Тимофеевも同様である。[Г.Р.Я. т.Ⅱ§§ 1057～1068/Тимофеев, стр. 267～291]）シンタクティックな観点を混入させているものが殆どである。その点，79年のプラハアカデミー文法，80年文法は一貫して意味に

よる分類を行っている。本稿では，叙想の意味と，構文の特長の関係を明らかにするとともに，意味とPinf Iの4つのパラダイムの実現との関係を知るために，80年文法の記述を以下にまとめてみる。

80年文法ではPinf Iを①客観的予定づけ②主観的予定づけ③知覚作用に関する表現に大きく分け，それぞれのグループ内で更に細かい分割を試みる。

① 客観的予定づけを者わす文

(a) 事態の必然性を示すもの。主としてVinfに быть が用いられ，Nd は必ず表現される：Быть грозе великой.（訳前出）このタイプは，79年文法によれば［ Быть ］＝∅しか実現しない。［ ЧСАН, §1357 ］ 80年文法は бы を含む構文を接続法とみなし，∅及び бы による接続法のみ実現すると定めている。

(b) 義務を表わすもの。義務の表現はPinf Iの最も基本的な叙想表現［Тимофеев, стр. 265 ］である： Вам работать.（あなた方は働かねばならない）この意味で文はлучше, хоть等の要素を持つ場合がある：Лучше вам уйти. ここでは,［ Быть ］ は4つのパラダイムのいずれをも実現する。

(c) 可能，不可能を表わすもの。可能についての言及は稀で，不可能性を表現する場合が中心となる。この時，Neg （否定辞）の存在が不可欠である： Не жить мне без тебя.（君なしには私は生きられない）

(d) 不必要，義務の不在を表わすもの。このタイプもNegを不可欠な要素として含む：Мне не ехать к нему.（彼のところへ行く必要はない）

上記(c)(d)はともに［ Быть ］のすべてのパラダイムを実現させる。但し79年文法は(c)のような表現の文がNdを表現するときには［ Быть ］＝∅しかないと記述している。［ ЧСАН, §1348 ］

(e) 不許容を表わすもの。これは(c)の不可能の意味に近く，［ Быть ］も4項全てのパラダイム実現させるので(c)の範中に入れても良いように思われるが，否定辞と же を含むタイプであるため，別扱いとしたのであろうか。この辺りは，シンタグマティックな分類を試みた70年文法が же を含む文を Neg + Vinf + же と図式化して一つの独立したグループとした事を反映しているといえよう： Не спорить же Мне с вами.（君たちと口論なんかできない）

② 主観的予定づけを表わす文

(f) 命令を表わすもの： Молчать! Не говорить! このタイプは Vinf が было, будет と共に用いられることはない。また Nd も表現されることは少い。

(g) 話者の願望を表現するもの。一般に(f)の延長上にあると考えられる。即ち(f)の命令の意味が弱まり話者の，行為の実現に対する願望が中心的な叙想の意味となる。(f)と違い Nd が表現されるのが普通である。

(h) 主観的に認識された適合性の表現に関するもの：Теперь уйти（去る時だ）

以上2グループは(f)同様［ Быть ］のパラダイムを∅しか実現させない。(g)(h)は願望のニュアンスを添える小詞 бы を持つ場合があるが，これは接続法ではない。

③ 知覚作用に関する表現

これは60年文法で無人称－不定形構文（инфинитивно-безличное предложение）と呼ばれた文で，Vinf の位置を占めるのが видать, слыхать, плевать, наплевать, знать といった特定の語彙であるという特長をもつ。主としてNegと共に用いられ，事実上行

為の不可能性について言及する： Ничего не видать. (= Ничего не видно.) Ничего не слыхать. (= Ничего не слышно.)

この文において [Быть] は全てのパラダイムを実現させる。[以上 Р.Г. §§ 2561～2567]

Ⅱ－4　80年文法の記述から Pinf Ⅰ の叙想の意味と，構文上の特長を記してみたが，これを今一度整理してみたい。それぞれの叙想の意味を表現する構文を図式化し，更にパラダイムの実現を確認すると

(a)	必　然	Nd + [Быть] + Vinf （主に быть）	[Быть] = Ø のみ
(b)	義　務	Nd + [Быть] + Vinf	4　項
(c)	不可能	Nd + Neg + [Быть] + Vinf	4　項
	（可　能	Nd + [Быть] + Vinf ）	
(d)	不必要	Nd + Neg + [Быть] + Vinf	4　項
(e)	不許容	Nd + Neg + [Быть] + Vinf + же	4　項
(f)	命　命	(Nd) ± Neg + [Быть?] + Vinf	?
(g)	願　望	Nd + [Быть] + Vinf	Ø のみ
(h)	適合性	Nd + [Быть] + Vinf	Ø のみ
(i)	知　覚	Nd+Neg+[Быть]+Vinf (= видать, слыхать, etc.)	4　項

以上のように列挙することができる。ここから Pinf Ⅰ の叙想の意味についての考察を行う。

考察 1.　上記(a)～(i)の中で(f)の特異性に注意する必要がある。 Vinf による命令は，命令に法に代わるものと考えることができる。事実　Vinf　は絶対的な命令を表わし，時に Nn の主語を持つ： Вы - молчать!　Vinf が命令法のヴァリアントであるとするならば(f)の文は， Pinf Ⅰ　の基本構造　Nd + [быть] + Vinf　を持たないことになる。　即ち Nd は表現されないのでなく元々 Nd の要素を含んでおらず，　[Быть]　も同様に，Ø で実現されているのではなく，要素として持っていないことになる。　本稿では80年文法をはじめとする多くの文法書に準じて(f)の型の文を他の文と同列に論じてきたが，　Veyrenc　は，Шахматов が(f)の型の文を定人称二項文とした点を支持しながら，(f)型 の文を慎重に他の文と区別し，前者を定人称一項文と定めている。[Veyrenc, p. 14-18]　但し，(b)の義務を表わす文が二人称に向けられ，強いイントネーションを持つと(f)に近づくことが考えられるので，厳密な文法的境界を設けることは困難かと思われる。ここでは(f)の文が　Pinf Ⅰ　の中　では周辺的な構文であることを指摘するにとどめたい。

考察 2.　(a)～(i)の意味表現と各文のシンタクティックな構造から，Pinf Ⅰ における構造と意味の基本的関係を見い出すことができる。肯定文としての Pinf Ⅰ　が表現する基本的な叙想の意味は(b)の義務　(a)の必然性であり，Neg を含む文は(a)(b)の単純否定としての義務，必然性の欠如を表わすか，あるいは行為の不可能性を表わす。従ってある肯定の Pinf Ⅰ が義務ないし必然性を表現する時，対応する否定の Pinf Ⅰ は義務，必然性の否定か，行為の不可能性を表現し，後者の場合 Neg の介入による叙想の意味の転換（義務，必然性→不可能）が行われることになる。この基本的な叙想の意味に文中の他のシンタグムの意味やイントネーション，発話の状況が絡んで派生的な叙想のニュアンスが生じていくのである。

Ⅱ－5.　先にも触れたように，　Pinf Ⅰ　の叙想表現に深くかかわるものにイントネーションがある。今度はイントネーションと叙想の意味の関係を見ていくことにする。イントネーションは

実際の発話の中で実践されるものであるが，記述された文にあっても感嘆符，疑問符の表記や発話の前後関係によって特殊なイントネーションを想定させることができる。Pinf I の叙想表現に最も関係するのは，反意的イントネーションの介入である。例えば，Зачем вам уйти?

という文はイントネーションの介入の有無により文字通りの意味の疑問文に解される場合と，表面上の意味は等しいながらそれとは反対の叙想の意味を表現するものと解される場合にわかれる。この種の反意的表現は疑問文で示される。そこで，ノーマルな疑問文と反意的疑問文の叙想の意味の相異について，疑問文の形式ごとに調べてみることにする。まず Pinf I における疑問文を次のように分ける。

(1) 疑問詞を含まず否定辞を含まない文：

Nd + [Быть] + Vinf?

(2) 疑問詞を含まず否定辞を含む文：

Nd + Neg + [Быть] + Vinf?

(3) 疑問詞を含み否定辞を含まない文： K + Nd + [Быть] + Vinf?

（但しKは疑問代名詞，疑問副詞）

(4) 疑問詞を含み否定辞を含む文：

K + Nd + Neg + [Быть] + Vinf?

上の(1)〜(4)の疑問文の文字通りの意味は，II－4.で述べた基本的意味をあてはめて(1)義務(2)義務の欠如または不可能，(3)義務，(4)義務の欠如または不可能，と置くことができる。ではこれらが 反意的に用いられるとどうなるか。この点については60年文法あるいは Тимофеев の記述の中から関連箇所を拾い，順にまとめてみる。

(1) Nd + [Быть] + Vinf ! (?)

実際には余り使われない型である。[Тимофеев, стр. 270] 行為の必然性，義務の否定ほど強い反意表現は行わず，本来の疑問文の文字通りの意味に対する疑いを表わす。[Г.Р.Я. т.II §1059/Тимофеев, стр. 270]

(2) Nd + Neg + [Быть] + Vinf ! (?)

反意的表現における否定要素は事実上肯定の意味となる。文字通りの意味が行為の不必要性を表わす場合には反意表現では必然性，義務を，行為の不可能性を表わす場合には可能性を表わすことになる。 [Тимофеев, стр. 276]

(3) K + Nd + [Быть] + Vinf ! (?)

最も多く反意表現として用いられる形である。用いられるKの内容により叙想のニュアンスが異なる。 Зачем, для чего が用いられる時，普通文は不必要，義務の否定を表わす：Зачем ему ехать? = незачем, не надо ему ехать. [Тимофеев,стр.271]その他の疑問詞が用いられる時反意表現は行為の不可能性を表わす。

(4) K + Nd + Neg + [Быть] + Vinf ! (?)

否定辞を含むことから文字通りの意味は行為の不必要性，あるいは不可能性についての問いとなる。従ってこの反意表現は(2)と同様，義務，必然性あるいは可能性の表現となる。

反意表現によって Pinf I が行為の可能性についての叙想表現を行いうるというのは興味深い点である。II－4.で見たように，平叙文の形をとる Pinf Iにおいては可能性の表現はごく稀にしか行われないが，否定辞を含む疑問文の反意表現によって自然に可能性を表現する手段が得られるのである。

IIのまとめとして Pinf I のタイプと，基本的な叙想の意味の関係を図式化する。

<基　本>	Nd + [Быть] + Vinf	〔義務・必然〕－①
<基本＋Neg>	Nd + Neg + [Быть] + Vinf	①の単純否定 不　可　能
<基　本>?	Nd + [Быть] + Vinf?	①の単純疑問 反意表現－疑い
<基本＋K>?	K + Nd + [Быть] + Vinf?	単純疑問 反意表現－不必要 反意表現－不可能
<基本＋Neg>?	Nd + Neg + [Быть] + Vinf?	単純疑問－不必要 単純疑問－不可能 反意表現－義務 反意表現－可能
<基本＋Neg＋K>?	K + Nd + Neg + [Быть] + Vinf?	単純疑問－不必要 単純疑問－不可能 反意表現－義務 反意表現－可能

III Некуда идти./Есть куда идти. のタイプの文について

ロシア語には上記のような Vinf を含む構文がある。79年文法はこの型の文を Pinf Iと同じ箇所で扱い，可能，不可能の意味を表わす文としている。［ЧСАН，§1347］しかしながらこの型の文の構造については未だ明確な定義がなく，文をロシア語の文構造の内でどう位置づけるかも定まっていない。このタイプに用いられる быть の変化形を Pinf Iのそれと区別するために仮に〔E〕とおくことにすると，Фролова はこの型の文が〔E〕と Vinf という二つの陳述の中心を持ち，〔E〕が存在の叙述を行い時制を示す一方で Vinf が行為の可能性の叙想表現を行い，〔E〕で示される時に後行する時間的意味を表現することを挙げて，この型の文を複文と単文の中間に位置すを特殊な構文とみなしている。［Фролова，стр. 102-104］. Фролова のこの考え方に比べ，Тимофеев や Янко-Триницкая の考えはより文法的に明確であるように思われる。彼らによればこの文は〔E〕を述語としKあるいはKneg（否定を含むK）及びVinfの結合を主語とする二項文となる。［Тимофеев，стр. 291］だが，もしそうであるなら Kneg（あるいはK）＋ Vinf ── это〔E〕と言いかえが可能なはずである。しかし，*Не с кем идти ── это было. などという文が成立するだろうか？

この型の文については他にも無人称文の特殊な構文として扱おうとする試みなどがあるが，満足な説明は未だ与えられていないのが事実である。この型の文に関する考察はいずれ行ってみたいと思うが，少くとも Nd＋[Быть]＋Vinf の Pinf I とは異なる構造を持つと考えるべきであろう。

注

(1) 80年文法ではさらに条件法を加え5項のパラダイムとしているが，ここでは単文のみを扱うので，従属複文の要素となる条件法は省略した。

(2) А.А. Курилова, "Из наблюдений над синтаксисом А. Блока,Науково-дослидчои категоры мовознавства" №2. Харьков, 1929. (Галкина-Федорук, стр. 219. より引用)

(3) A.V. Icačenko, Grammatičeskii stroi russkogo jazyka, 2. Bratislava, 1960, p. 569-570. (Veyrenc, P. 35 より引用)

参 考 文 献

(1) Грамматика русского языка, М. 1960. т.2. (Г.Р.Я. と略)

(2) П.А. Лекант, Синтаксис простого предложения в современном русском языке, М. "Высшая школа" 1976

(3) Грамматика современного русского литературного языка,М. 1970

(4) Русская грамматика, т.2 М. 1980 (Р.Г. と略)

(5) К.А. Тимофеев, Об основных типах инфинитивных предложений в современном русском литературном языке, в кн. Вопросы систаксика современного русского языка под ред. В.В. Виноградова. М. Учпедгиз, 1950.

(6) Галкина-Федорук, Безличные предложения в современном русском языке, МГУ. 1958.

(7) Русская Грамматика, т.2 Academia Praha. 1979 (ЧСАН と略)

(8) Фролова, И.А. "Об одном типе простого предложения с усложненной предикативной характеристикой" РЯШ 1978 №6 стр. 100-104

(9) J. Veyrenc, Les proposotions infinitives en russe. Institut d'étude slaves, Paris 1979